

■世阿弥(観世元清)

ぜあみ
山名時氏征討1363=

能役者、謡曲作者。“能楽”を大成して祖となるも、長寿が災いし、悲劇的な晩年となった。

すでに大和猿楽結崎座のスター役者だったと推定される観阿弥の子に生まれる。

数多い田楽や猿楽の能役者が芸を競う中から、観阿弥が抜け出る要因となった音曲改革に取り組んだのは世阿弥の幼年期であり、

足利義満将軍1368= 5歳 :

応安新式・・・1372= 9歳 : この頃、京洛に父親阿弥の名声を高めた醍醐寺での猿楽には世阿弥も出演。

観世父子登場1374=11歳 : 観阿弥が洛東今熊野で催した猿楽能を将軍足利義満が見物し、以来彼は観世父子に絶大な庇護を加える。世阿弥の可憐さが義満を魅了したらしい。父親阿弥が子を貴人の賞玩向きに教育したものと考えられる。

室町御所始・1378=15歳 : 足利義満、藤若(世阿弥)を寵愛する。

義満親政始・1379=16歳 :

了俊九州支配1381=18歳 :

・・・・・・1384=21歳 : 父が死去、まだ初心段階ながら観世大夫(結崎座の演能グループたる観世座の統率者)を継ぐ。

土岐氏の乱・1390=27歳 :

南北朝合一・1392=29歳 :

美童としての魅力はすでに失せ、田楽新座の喜阿弥や近江猿楽比叡座の犬王らの競争相手も父の在り世から台頭しており、新大夫の前途は多難だったろうが、世阿弥は精進を重ねて苦境をのりこえたようで(当時の記録は皆無に近い)、

応永の乱・・・1399=36歳 : *京都一条竹ヶ鼻で3日間の勸進猿楽(勸進能)を催し、将軍の台臨を得て、天下の名声を獲得した。

・・・・・・1400=37歳 : 自信の表れか、「風姿花伝」の第三までを書く。

遣明船始・・・1401=38歳 : この頃、芸名の世阿弥陀仏を称したらしく、セアではなくゼアと濁ったのは義満の裁定に基づく。

日明貿易成立1404=41歳 :

犬王の出世により、地位を揺るがせられるが、大和猿楽の伝統たる物まね主体の“面白き能”から、歌舞中心の“美しき能”への方向転換、犬王の長所を参照した能の歌舞劇化が成功して、名声を保ち、その後の能の質的向上をももたらしたように思われる。

足利義満没・1408=45歳 : 北山第行幸直後に*義満が急逝し、世阿弥はよき後援者・批判者を失う。

義満の後嗣義持は、父の方針を改めること多く、芸能後援についても尊氏時代に戻して田楽を重んじた。

・・・・・・1417=54歳 :

・・・・・・1418=55歳 : 「花習内拔書」を著す。*「花伝第七別紙口伝」を元次に相伝、以後、相伝のための著述を次々行い、

応永の外寇・1419=56歳 : 「音曲声出口伝」、

・・・・・・1420=57歳 : 「至花道」、

・・・・・・1421=58歳 : 「二曲三体人形図」、

・・・・・・1422=59歳 :

この頃、出家し、観世大夫の地位を子の観世元雅に譲る。引退したわけではなく、出家後も能を演じ、元雅や次男の七郎元能や甥の三郎元重(のちの音阿弥)らを教導。子弟の成長で観世座は発展の一途をたどり、自身の芸も円熟の境に達し、絶頂期となる。高度な能楽論が續々と書かれたし、彼が多く能を創作したのも出家前後が中心らしい。

足利義持出家1423=60歳 : この頃、「五位」「曲付次第」「風曲集」「遊楽習道風見」「三道」、

・・・・・・1424=61歳 : この頃、醍醐寺清滝宮の楽頭職につく。

馬借京乱入・1426=63歳 :

義教籤引将軍1428=65歳 : 「九位」「六義」。女婿金春禅竹のため「拾玉得花」を著述。義持が死去、弟の義教が将軍になって、意外な悲運が訪れ、

播磨国一揆・1429=66歳 : 仙洞御所での能の阻止、

尚氏王統確立1430=67歳 : 「五音曲条々」「習道書」。醍醐寺清滝宮の楽頭職剥奪など、義教の弾圧下にも、一座の結束をはかるなど、意欲は衰えなかったが、

・・・・・・1431=68歳 : 「花鏡」。元能が父の芸談を「申楽談儀」にまとめて遁世し、

日明貿易回復・1432=69歳 : 元雅が伊勢で客死、観世座の本流は断絶してしまう。老後に後嗣を失った嘆きは「夢跡一紙」に痛ましく、

・・・・・・1433=70歳 : 「却来華」は相伝者のいないまま後代への形見として書かれている。この年元重が観世大夫となったが、その大夫継承をめぐって将軍の怒りに触れたのか、

世阿弥配流・1434=71歳 : この年以前、「五音」を著す。*老残の身を佐渡へ流され、

・・・・・・1435=72歳 :

・・・・・・1436=73歳 : 在島中も小謡曲舞集「金島書」を著す。

永享の乱始・1438=75歳 :

嘉吉の乱・・・1441=78歳 :

対馬嘉吉条約1443=80歳 : 不遇のうちに波乱多き出涯を閉じたい。

中公シリーズ「日本の名著」、「日本史を変えた人物200人」、「日本史重要人物101」、「この人どんな人」、「没年日本史人物事典」、「人物日本歴史館」、「日本の群像」、平凡社百科事典、山田風太郎「人間臨終図巻」、「目でみる日本人物百科」、日本の古典名著、松岡心平「中世を創った人々」、